

「語り」論覚書

——三浦佑之氏『口語訳 古事記』書評——

福田 武史

三浦佑之氏『口語訳 古事記 完全版』（文藝春秋 二〇〇二年六月）四九四頁。

「この本は、古事記のほぼ完璧な口語訳でありながら、古事記という作品を突き抜けようという意志によって貫かれています」（七頁）という前置きで始まるこの書は、一人の「古老」が口伝えの神話伝承を語るといふスタイルをとる。その古老は「おそらく七世紀の中頃にヤマトの王権の近くにいた人物」（九頁）で、かつ「ヤマトの王権を支える神話や歴史を語り継ぐ語り部の末裔」（同右）であるという設定が、古事記というテキストに対する三浦氏の立場を明確にしている。三浦氏は古老の口を通じて「古事記という固有の作品が出現するのに先立って、「ふること（古事）」を支えていた人びとが語ろう

とした世界」（八頁）を描出することを試みているのである。よって、古事記原文に書かれている内容は「ほぼ完璧」に訳出される一方、そこに大量の古老の「独白」が織り交ぜられており、例えば、景行天皇の皇子ヤマトタケルがイツモタケルを討ち取った箇所では、

なんともひどい殺り口よのう。友の契りを結んでおきながら、心を許した友をだまし討ちにするというのじゃから……。おまけに嘲りの歌まで歌うとはのう。ヤマトタケルは頭が切れるでこのう、こうした振る舞いを思いつくのじゃが、こうなると、かしこい方というよりは、ずるい方じゃと言われても返す言葉はないよのう。（一九八頁）

という価値判断を下し、アマテラスとスサノヲが「うけひ」の

後に子供を産んだ箇所では、

それにしてももう、スサノヲの心はいかばかりじゃったろうの。(中略)そもそも、ウケヒ生みの前に、なんの取り決めもなさらなかったというのは、なぜじゃろうのう。それがないとウケヒは成り立たんのじゃが……。いや、どうにも、この老いぼれにはわからんわい。神の代のことじゃでう。(四〇—一頁)

と、伝承の内容に疑問を挟むなど、縦横無尽ともいえる「語り」の世界をあらしめている。そこには、(天皇号の成立は七世紀後半という認識のもとで)古事記中に登場する「天皇」という語をすべて「大君」に直すという徹底さも含まれ、中巻の冒頭にあるはずの神武天皇段を、上巻の最後、「神の代の語りこと」(二四一頁)に組み入れてしまうというテキストそのものの再構成も図られているのである。

このような「独白」部分と、全篇にわたって詳細に付された脚注とが相互に補完するかたちで古事記の解釈を示すというのは極めて画期的な試みであり、一方でそれは「古事記という作品を突き抜けよう」(七頁)とするための戦略的な手法であったといえよう。

つまり、古事記という書物の性格について「文字の論理と

語りの論理とがせめぎ合うただ中に置かれた作品」(二八三頁)だと三浦氏は規定し、文字の向こう側になお「語り」という文字化以前の伝承の姿を捉えようとするのだが、それは近年、神野志隆光氏らが積極的に推進してきた作品論的立場に対する挑戦であった。三浦氏は最近の研究動向を「古事記を閉じた世界に封じ込めようとするような動き」(三九三頁)と批判し、古事記の物語は「音声によって語り継がれていた古伝承をそのまま文字化したものではない」(三七八頁)と認めつつ、古事記の物語が「もともともどのようなかたちで存在したのか」ということを問うこと(同右)こそが必要だと説く。神野志氏が『古事記』の神話・説話をとりあげて、そこから一般的に神話・説話を論じてしまうのは、次元の違うところへ議論を横すべりさせることにしかならない。それはひらかれた『古事記』論のようである虚構の論にすぎないのではないか⁽³⁾と、言うことを意識しているのは明らかであろう。

もとより、双方の立場は噛み合わない。可能なものがあるとするれば、「語り」を背景に持つと認定される文字テキストから実際に「語り」へとアプローチしようとした、その実践から導かれた結論を検証することであろう。

二

そこで一旦、古事記を離れて「語り」の問題を『遠野物語』

を通じて直視したい。ここで『遠野物語』を持ち出すのは唐突なことではない。三浦氏はその著作、『村落伝承論』（五柳書院 一九八七年）のなかで『遠野物語』を取り上げるのだが、その理由を、

古代律令国家の側の論理によって文字化された記・紀・風土記の表現の向こう側に、古代村落の言語表現ほどの程度見通せるのか。文字を通して、しかも漢文脈に翻訳された文字を通して、無文字の言語表現はどのように想定できるのか。——今、古代文学の表現を考えようとして誰もがぶつかろうとした疑問に私なりの解答を試みようとしたとき、私の前に、研究対象としてあらわれてきた作品が『遠野物語』であった。……とくにここでは、村落共同体の伝承という問題にこだわられてきた。それが、私の立脚点であるところの古代の伝承の総体を究明するための一つのアプローチとして有効だと考えたからである。（『村落伝承論』二九一―二頁）

と述べる。古事記の「語り」に向かうための準備であったことが窺われる点が興味深く、『遠野物語』に向かう態度も古事記に対するそれと類似する。

明らかに、近代人としての、知識人としての柳田国男の手が加わっている部分があるとしても、『遠野物語』に、前近代の村落の伝承の姿がみえるというのも確かなことなのである。（『村落伝承論』八一―二頁）

佐々木喜善の口述（語り）と柳田国男の筆記（文字化）という明白で確実な来歴を持つ『遠野物語』は、「文字」の向こうにある「語り」を抽出する材料として確かに絶好なテキストであろう。だとすれば、そのテキスト分析によって、「語り」論の有効性あるいは限界をよりはっきりと浮き彫りにすることができると考えられないか。

『遠野物語』説話番号一〇〇番を取り上げよう。この説話は岩本由輝氏「もう一つの遠野物語」（刀水書房 追補版一九九四年）でも言及されているように、水野葉舟によるヴァリアントが残されており、比較対照のための便宜を提供している点で注目される。⁽⁴⁾

まず、『遠野物語』の当該説話を掲げる。⁽⁵⁾

船越の漁夫何某、ある日仲間の者と共に吉利吉里より帰るとて、夜深く四十八坂のあたりを通りしに、小川のある所にて一人の女に逢ふ。見ればわが妻なり。されどもかかる夜中にひとりこの辺に来べき道理なければ、必定

化物ならんと思ひ定め、やにはに魚切り庖丁を持ちて後の方より差し通したれば、悲しき声を立てて死したり。しばらくの間は正体を現はさざればさすがに心にかかり、後の事を連れの者に頼み、おのれは馳せて家に帰りしに、妻は事もなく家に待ちてあり。今恐ろしき夢を見たり。あまり帰りの遅ければ夢に途中まで見に出でたるに、山路にて何とも知れぬ者に脅かされて、命を取らるると思ひて目覚めたりといふ。さてはと合点して再び以前の場所へ引き返して見れば、山にて殺したりし女は連れの者が見てをるうちにつひに一匹の狐となりたりといへり。夢の野山を行くにこの獣の身を備ふことありとみゆ。

続いて、水野葉舟「怪談」所収の、同じ「語り」をもとにした説話。

これは狐の話である。やはり土淵村近所の魚売が（土淵村は陸中上閉伊郡にあり、佐々木君の郷里）、海岸の方に魚を買ひ出しに行つた。夜更けてから、二人連れて峠を越して帰つて来た。峠を越して来る頃にはもう夜が更けて居た。峠の途中まで来たと思ふと、彼方から一人の方の案内が歩いて来る。近く寄つてから見ると、如何も少しぼけたやうな顔付をして居る。この夜更けに女一人で、

こんな山の中に来るわけは無い、これは屹度狐が魚を取りに来たのだらうと言ふので、近く寄つて来るのをイキナリ棒でナグリ倒してしまつた。で、倒れたのを見ると、矢張りもとの通の女であつた。それで、一人の方は驚いて、兎も角も大急ぎで家まで帰つて来るから、ここに待つて居てくれと言つて、帰つて来た。帰つて来て戸口を入ると、その男の案内は、ハァ——と、大きな吐息をして目を覚ました。そして夫の顔を見ると、「あ、驚いた。恐ろしい夢を見たものだ。私はあなたの帰りが遅いから、迎へに行くと、××峠で出逢つたらば、あなた達は二人で私を打ち倒した……夢でよかつた。」と言つた。夫の魚売りは其で一安心して、ともかくもと、又引き返して来て見ると、死んで居たのは狐であつた。

この二つの話の小異をどのように捉えるべきか。岩本氏は、『遠野物語』所収の話が場面を遠野盆地外に設定している点、また、狐を襲つた際の凶器が異なっている点に注目し、「こうしたことから推して、この話については、柳田と水野は佐々木から同時に聞いたものとみることはできない」と、展開の違いは佐々木の語つた話の内容がその都度変化したことに起因するといふ。

口頭伝承の語り手が基本的な筋を守りつつも、場や状況に

応じて物語を組み立て直していくことがあるという事実はすでにW・J・オングや川田順造氏らの研究によって明らかである⁽⁸⁾。しかし、柳田や水野は、録音した語りを書き起こすという現代の口承文芸学者が用いる手法で佐々木の語りを記録したわけではない。柳田が初版序文で「自分もまた一字一句をも加減せず感じたままを書きたり」と言明するのも、「話の内容は改めていない、しかし鏡石の語り口に満足できぬ柳田が自己の責任において文章としたという意味」と桑原武夫氏が述べる通りである。だとすれば、柳田と水野それぞれの手になる物語の比較は、「語り」というレベルに引き取る前に、まずはテキストの問題として考察することが求められるであろう。

山中で妻に化けた狐を夫が殺し、その正体がしばらくの間露見しなかったために急いで帰宅すると、妻は夫に襲撃される夢を見ていた、という物語の枠組みは同じであり、明らかに同一の素材より派生したものと認められる。しかし、二つの異なるテキストの素材が同源に由来するということは、それぞれの話の「主題」の同一性を保障するものではない。話の構成の差異を「語り」のレベルでおさえてしまった場合、物語としての全体理解に至らない危険をはらんでいる。

当面の問題としている狐殺しの話で注目すべきは、柳田は「夢の野山に行くにこの獣の身を備ふことあり」と、夢見によ

って妻の精神が狐に作用を及ぼしたことを明示しているのに対し、水野の場合はあくまでも「狐の話」であることに終始し、妻が夢で夫を迎えに行ったことと狐が妻に化けていたこととの相互関係は不明瞭だという点である。二つの話の筋の異同は、このような主題の相違を、それぞれ独立で完結した物語として具現化した結果だと見るべきではないか。

柳田の話では、妻が「夢に途中まで見に出でたる」ことと、「獣の身を備ふ」ことが同時進行的（リアルタイム）であったと示され、妻が「命を取らるると思ひて」覚醒したことや、夫が帰宅していた時には既に起き上がって待っていたという記述と矛盾しない。ところが、水野の話によれば妻は夢のなかで「二人で私を打ち倒した」ことを体験し、しかも夫の帰宅直後までそれを見ていたとすれば、夢見と狐の身に起こった出来事は同時進行的ではなく、妻の精神が狐の体を借りて動き回っていたということにもなるまい。むしろ、（妻の意識とは無関係に）妻に化けていた狐が夫に殺害された後、その経緯を妻が正夢として追体験していたと理解するのが自然である⁽¹⁰⁾。二つの話は類似しながらも、その全体のまとまりにおいて異質の物語だと言わざるをえない。

妻が狐の身に宿って時を歩き回っていたというのが本来の「語り」なのか、それともそれは柳田の「文字化」による文飾なのか、あるいは佐々木が異なる主題の「語り」をそれぞれ

提示したのか、判断する術はない。文字化のフィルターを取り除き、テキストから「語り」を再構築するという方法論は、結局、現実には遡及することができない「語り」という虚像を生み出す危険性を持つ。

『口語訳 古事記』の抱える本質的な問題点も、ここにある。

三

そのような虚像の創出は神話の再生産（新たな神話の創造）に繋がるだけである。具体例に即してその点を確認し、まとめとしたい。

文章の向こう側に本来的にあるとする「語り」を念頭に置きながら古事記の新しい解釈を提起するということであるならば、古事記と同様に漢字で書かれた神話テキストとしてある日本書紀について三浦氏はどのようにお考えなのか、是非ともより踏み込んで言及してもらいたかった。わずかに解説中に、「出雲神話」の取り扱いを巡って、「語りの論理に生きる古事記」と「文字の論理を内在化させた日本書紀」（二三八一頁）という対比でその違いを述べるのが示唆的である。では、日本書紀は古事記よりも伝承から隔たっているのか、古事記と同様にある操作を行えばそれを抽出できるのか、日本書紀の背後には古事記と同一の語りのトポスがあるのか、それとも何種類もの別の口承の伝説が入り組んでいるのか。「古事記

から離れてどこまで普遍化できるのか」（三九四頁）という読みの立場は、三浦氏にとって日本書紀の新たな読みへの扉をも開くことにつながるはずであるが、その道筋は示されていない。

古事記の上巻、

於是、天神諸命以、詔伊耶那岐命・伊耶那美命二柱神、修理固成是多陀用弊流之國、賜天沼矛而、言依賜也。故、二柱神、立天浮橋而、指下其沼矛以画者、塩許々袁々呂々、遡画鳴而、引上時、自其矛末垂落塩之、累積成島。是、淤能碁呂島。⁽¹⁾

この「許々袁々呂々遡」への注に、「古事記は、伝承されていた語句や音声的な部分を音仮名で表記する場合が多い。文字化以前の語りの姿を強く残している」とみなせよう（一八頁）というのだが、研究的には日本書紀と伝承との関わりにおいて問題となってきた箇所であることは見逃せない。

私記曰。問。画字訓読長短之説如何。答。師説アヲウナハラヲシホコヲロコヲロニカヒナシテ。是古事記之説也。但旧説、只画読カキナス。而昔承和之講、滋相公相定云、既有鳴声。当標其響。故依古事記之意、加此長詞

『新日本紀』が引用する日本書紀講書の議論であるが、対象となつてゐるのは前掲した古事記の記事と類話の關係にある日本書紀神代上・第四段一書(第一)の一文である。

一書曰、天神謂伊弉諾尊・伊弉冉尊曰、有豊葦原千五百秋瑞穂之地。宜汝往脩之、廻賜天瓊戈。於是二神立於天上浮橋、投戈求地。因画滄海而引拳之、即戈鋒垂落之潮、結而為嶋。名曰叡馭慮嶋。(13)

「画」を字に即して単に「カキナス」と訓むのではなく、「古事記之意」に依拠して「アヲウナハラヲシホコロコロニカヒナシテ」と、本文に書いていないものを持ち出してよんでいってしまう。この講書の営みは、日本書紀の一部分は古事記を翻案したものだということと、古事記の表現は文字化以前の口承の古伝・古語を伝えている、という二つの認識によって支えられている。(14) 実に、平安期の日本書紀講書における認識と、文字の向こう側に「語り」を再現させようとする三浦氏の方法論は、その発想の枠組みにおいて軌を一にするのである。

しかし、「シホコロコロニ」を、古事記・日本書紀共通

の「文字化以前の語りの姿を強く残している」(前掲)ことばとして認定することはできない。そもそも、古事記と日本書紀一書の国土生成神話は物語として対応關係にはない。(15) 日本書紀一書で二柱がかき回しているのは海水(「滄海」)であつて、古事記においてかき回しているのは、冒頭で「国稚如浮脂而、久羅下那州多陀用弊流之時」と見える、「天」(高天原)に対して未完成の状態にあつた「多陀用弊流之国」なのである。それを「塩許々袁々呂々」という海水のイメージによって説明しているということになる。対応しないものを、あたかも対応しているかのように「文字の論理」を無化して整合させるのは正当な方法ではない。もちろん、三浦氏は日本書紀については言及していないので、講書と「発想の枠組みにおいて軌を一にする」と言われるのは不本意であるかもしれない。お考えをうかがいたい所以である。

文字によって記された日本書紀というテキストに和語をあてながら、時には古事記など外部のテキストの表現を援用しつつ訓む、それは当然のことながらまず文章があつて訓みはその結果でしかない。その關係を逆転させて、訓読を通じて与えられた和語こそが文字化に先立つ表現であつて、本来的な伝承であるというように定位するのが日本書紀講書の目指したものであつたとすれば、古事記の文を訓んだ結果を「語り」へと還流させる方法も本質的に同様の問題を抱えている

と言えるだろう。

注

(1) 三浦氏が主宰する「口語訳古事記ホームページ」において、内容案内・誤植の訂正・関連情報・書評の紹介などが随時更新され、公表されている。

<http://homepage2.nifty.com/waway/>

(2) 訳文の間に作者の語り口が混在する作品として早いものは石川淳『新釈古事記』(角川書店 一九八三年)がある。

(3) 神野志隆光『古事記 天皇の世界の物語』(日本放送出版協会 一九九五年) 五頁。

(4) 岩本由輝『もう一つの遠野物語』六三―六頁。ここで紹介されている水野葉舟「狐に魅されし話の数々」は割愛する。

(5) 柳田国男『遠野物語 付・遠野物語拾遺』(角川文庫 改版一九九五年) 五七頁。

(6) 水野葉舟「怪談」(『趣味』四・六一九〇九年六月) 二―三頁。原文の傍点や段落は無視した。

(7) 『もう一つの遠野物語』六六頁。

(8) ウォルター・J・オング『声の文化と文字の文化』(藤原書店 一九九一年) 川田順造『無文字社会の歴史』(岩波現代文庫 二〇〇一年) など。

(9) 柳田国男『遠野物語 山の人生』(岩波文庫 一九七六年) 三二六頁(桑原武夫氏による解説)。「鏡石」とは佐々木喜善のこ

と。

(10) 唐・白行簡『三夢記』(『說郛』卷四)の、「人之夢異於常者有之。或彼夢有所往而此遇之者、或此有所為而彼夢之者(以下略)」という分類が示唆的である。柳田の話が「彼夢有所往而此遇之者」(第三者が夢にどこかへ赴き、当方がそれに出逢う場合)であり、水野の話が「此有所為而彼夢之者」(当方の行動を第三者が夢に見る場合)に対応する。

(11) 『口語訳 古事記』は原文を掲出ししない。神野志隆光・山口佳紀校注『古事記』(新編日本古典文学全集 小学館 一九九七年) 三〇頁。

(12) 釈日本紀の引用は新訂増補国史大系本による。二二四頁。

(13) 坂本太郎ほか校注『日本書紀 上』(日本古典文学大系 岩波書店 一九六七年) 八三頁。

(14) 拙論『倭訓』の物語としての『日本書紀』(『国文学』四四・七一 一九九九年九月)

(15) 神野志隆光・山口佳紀『古事記注解 二』(笠間書院 一九九三年) 七二―四頁。